パーシィ・ビッシュ・シェリー

## ３　　復讐の悪魔ガースタ！！！

この物語のアイデアはいくつかのドイツのバラッドから採ったものである。主人公は明らかに「さまよえるユダヤ人」であり、その名前は書かれていないが、額に刻まれた燃える十字架が疑いなくシュヴァルツヴァルトというドイツの森林地帯に流布していた伝説を想起させる。そこがこの物語の舞台と考えられている。

聞け！　梟（ふくろう）が翼をはためかせ飛んでいる
　眼下には道なき谷
聞け！　夜鳴鳥（ごいさぎ）が大きな声で鳴いている
　絶望と死を告げているのだ

恐怖が空一面を覆っている
　黒い雲が月に影を落している
備えよ！　人間どもよ　お前たちは死ぬ運命
　すみやかに魂を渡す準備をするのだ

激しい嵐が吹き荒れ
　大きな稲妻が幾度も光っている
すさまじい雷が大地を揺らし
　稲光と轟きが空全体を埋め尽している

聞け！　村の鐘が鳴り
　真夜中の到来を告げる
今や　地獄から来た悪魔どもが飛びたち
　悪魔のような子鬼（ゴブリン）どもが歩き回っている

見よ！　頭を雨ですっかり濡らし
　道を急ぐ戦士は
びくびくと辺りを見回し
　迫りくる夜明けを悟り　溜息をつく
見よ！　暴れる馬を手綱で御している
　見よ！　両手を高く掲げ
悪魔からもたらされる苦痛への
　猶予を乞い願っている

疲れてふらふらになった戦士は宿を求めた

　疲労でぐったりとなった大きな身体(からだ)を
疲れ果てた手足をしばし休めるため
　放浪と嵐で疲れきったその手足を休めるため
　・　・　・　・　・　・
　・　・　・　・　・　・
扉がゆっくりと大きく開かれ
　音もなく見知らぬ男が入ってきた
堂々とした様で　ゆったりとした歩調
　座った男は口をきかず　名のりもしない

恐怖で戦士の頬は青ざめて
　冷や汗が額から滴った
なんとか話そうとしたが言葉がでない
　するとついに見知らぬ男がこう切り出した

「死を免れぬ者よ！　お前は亡霊を見た
　私が知りたいことを教えてくれ
さもなくば　夜が明けぬうちに私と共に来てくれ
　イトスギとマンドレークが生えている場所へ

復讐する悪魔の激しい怒りは
　冬の突風よりも激しく
夜の暗がり迫るころの
　稲妻よりも激しいのだ」

戦士が落ちくぼんだ眼(まなこ)を上げると
　そこには男の陰気なしかめ面
「死を免れぬ者よ！　お前は死なねばならぬ」
　激しい言葉が戦士の魂を震えさせた

*戦士*

見知らぬ者よ！　あなたが誰であろうと
　語りたくてたまらない
奇妙な恐怖の話をあなたは聞くことになる
　地獄のごとく陰鬱な恐怖の話を

静けさが私の城を覆う
　夜遅く　もの寂しい時(とき)間
バルコニーで私は見たのだ
　すばやく過ぎる影のような霞(かすみ)が降りていくのを

夏の霧のように
　その一瞬にして過ぎる靄(もや)は朝日を遮(さえぎ)る
沼や渓流に立ち上(のぼ)る
　雲のように飛び過ぎていく

恐怖が私の震え慄く脳に襲いかかり
　驚いている私の目をかすませた
声を出そうとしたが言葉がでない
　その場から逃げようとしたが手足がきかなかった

その薄い影のようなものが
　静かに　足音も立てずに近づいてきた
風にはためく薄いローブを纏(まと)い
　頭には揺らめく炎の冠

秋めいた大地をわたる微(かす)かな風のような
　葉の落ちた木々の間をさすらう風のような
辺りに流れるマンドレークの呻き声のような
　暗く冷ややかな声が聞こえてきた

「あなたは私のもの　私はあなたのもの
　世界が沈むその時まで
私はあなたのもの　あなたは私のもの
　死が追放され破滅するまで

強い力と恐ろしい運命が
　私を地獄の深みから引きずり出し
永遠の死の扉を破るのです
　そこでは恐ろしい亡霊や死者たちが叫んでいます

罪を犯した者を拷問にかけて殺す炎にさえ
　私はひるまなかったでしょうし
快楽の花で飾った茨のベッドにさえ
　私は横たわらなかったでしょう

でも待って！　もう話を
　打ち明けるのは止めにします
この世での　私の苦悩は容赦ないもの
　でも　地獄での私の苦痛はもっと厳しいもの

今　私の愛する者としてあなたに求めます

　すべての恐怖を捨ててください
私の愛を証明してみせましょう
　経帷子を着た亡霊や死者たちがいるところで

だからあなたは私のもの　私はあなたのもの
　恐ろしい審判の日まで
私はあなたのもの　あなたは私のもの
　夜が終わる　私は立ち去らねばなりません」

なお私はじっと見つめた　その姿が
　私の疼く目に焼きついて離れなかった
私は激しく吹く嵐をものともしなかった
　ついに　その亡霊は夜の闇へと溶けていった

不安な　眠れぬ夜が過ぎ去った
　病の床に臥す人が眠れぬように
朝日を焦れて溜息をつき
　痛む頭で寝返りをうつように

遅々として進まぬ苦痛な昼間が過ぎ去った
　憂鬱が私の脳を襲った
ぐずぐずとした時間が過ぎた
　苦しんでいる哀れな者には長すぎた

ようやく夜が来た　あぁ！忌まわしい時間よ
　あぁ　死者を起こす恐ろしい時間よ
たれこめる雲に悪魔どもが乗るその時間
　亡霊が私のベッドに座った

まるで納骨堂から
　辺りの墓地に漂い出る
うめき声のような　うつろな声で
　女の亡霊が言った「あなたは私のもの」

女の冷たい指が私の顔に触れた
　魂も凍るような冷たい感触だった
死者の指のような
　墓石の周りに漂う湿り気のような冷たさだった

ぐずぐずと数か月が過ぎ
　毎晩その亡霊は現れる

身の気もよだつ足取りで地面を揺るがし
　私の周りを歩き回るのだ

見知らぬ者よ！　私はあなたに
　話すべきことはすべて話した
見知らぬ者よ！　教えてくれ　あなたは知っているはずだ
　地獄の悪魔から逃れる術を

*見知らぬ者*

戦士よ！　お前の苦痛を和らげよう
　だからお願いだ　一緒に来てくれ
戦士よ！　全てを明らかにしよう
　だから頼む　私と来てくれ

嵐が漆黒の翼を
　マントのように空一面に広げている
夜鳴鳥(ごいさぎ)が鳴く
　「死を免れぬ者よ！　お前は死なねばならぬ」

ヒースで覆われた道を行く
　二人の眼前に　ついに川が出現した
見知らぬ者の顔は狂気じみて陰鬱
　固い大地が見知らぬ者の合図で揺れた

見知らぬ者は杖を頭の上に掲げ
　地面に円を描き
荒々しい呪文で呼びだされて
　足音もなく次々と死者たちがやって来た

見知らぬ者の額の燃える光が
　燃える赤い光が激しい風の中に煌(きら)めき
荒々しい呪文が死者たちを呼びだした
　死者たちの群が出現した

「ガースタ！　ガースタ！一緒に来てくれ
　お前の悪魔の群を連れて来るんだ
さあ　復讐の歌をうたえ
　ガースタ！　ガースタ！さあ　こちらへ」

灰色のマントを纏(まと)った忌まわしい姿が
　夜の嵐の中　音もなく横切っていく

「ガースタ！　ガースタ！さあ　こちらへ
　明るくなる前に　さあ早く」

見よ！　死者たちが経帷子(きょうかたびら)を着た亡霊を連れて来る
　ヒースの上を恐ろしい叫び声をあげながら
聞け！　死者たちが恐ろしい歌をうたっている
　絶望と死を告げる歌

彼の前に叫び声を上げる亡霊が立っている
　見よ！　彼女は目をぐるりと回し
痩せた手を上げ
　その足音は地面を揺り動かす

*見知らぬ者*

テレサの亡霊よ　答えよ
　お前はなぜ地上に戻って来たのか
早く答えよ　私は去らねばならぬ
　さもなくば　お前は炎に包まれ灰と化す

*亡霊*

力ある者よ　私はあなたを知っています
　天で一番の力を持つあなた
その炎で輝く額でわかります
　その煌(きら)めく目でわかります

その炎はすべてを焦がす！　ああ
　私は地獄の暗い深みからやって来ました
私の束の間の恋人　不実のラドルフを求めて
　力ある者よ　私はあなたをよく知っています

*見知らぬ者*

ガースタ！　あそこで彷徨(さまよ)っている亡霊を捕らえよ
　あの亡霊を奈落の底へと連れて行ってくれ
早く連れて行ってくれ　明るくなる前に
　死の墓へと連れて行ってくれ

足音なき死者たちの声を聞いたお前は
　朽ちていく墓に眠らねばならない
死を免れぬ者よ！　頭上を見よ
　死を免れぬ者よ！　お前は死なねばならぬ

炎で輝く十字架が
　戦士の姿を明るく照らし出す
伸び放題の真っ黒な髪が
　嵐の中　激しく舞っていた

戦士は目を上げて
　その炎の十字架をじっと見つめた
そこには恐怖と驚愕が坐していた
　神の永遠なる怒りが坐していた

戦慄が戦士の身体（からだ）を襲った
　それは夜の突風よりも
黄昏（たそがれ）過ぎる頃に降りる
　露よりも冷たかった

雷が広い空を揺るがし
　ヒースの茂る大地をも揺さぶった
「死を免れぬ者よ！　お前は死なねばならぬ」
　戦士は悶えながら死の淵へと沈んでいった

（伊藤真紀訳）